

巻頭言 「裏日本」から「表日本」に引っ越してきたころ

西川伸一

私の出身地は新潟県上越市である。本籍もそこになっている。いまも八十歳を越えた母親が一人で暮らしており、年末年始と五月の大型連休には人並みに帰省している。ただ、私が上越市に住んでいたのは、生まれてから小学校四年生が終わるまでの十年間に過ぎない。その後の二十年間は神奈川県大和市で育った。

いまでこそ「裏日本」という言い方は差別的・侮蔑的なニュアンスがあるので使われない。だが、一九七〇年代半ばころにはまだ「公式」に用いられていた。というのも、中学一年生のときに社会で習った日本の気候区分で、「裏日本式気候」という呼び方が教科書だったか地図帳だったかに載っていたからだ。「日本海側気候」も併記されており、どちらかがかっこに入っていたようにうつすらと覚えている。

さて、一九七二年四月のことである。父親がそれまでの三年間、大和にある支社に単身赴任していた。本社のある上越に戻れる見込みがなくなったのか、新興地の大和一旗揚げようと欲を出したのか。そのあたりの事情はわからないが、とにかく一家四人で「裏日本」から「表日本」に引っ越すことになった。

信越線高田駅で直江津発東京行きの特急あさま2号を待つ。駅には私たちのように東京近郊へ家族で引っ越す人びとが何組かいた。見送る人も大勢来ていて、朝七時台の駅はけっこうなにぎわいだった。列車が到着するとホームに「蛍の光」が流れる。乗車して席に座ると母親が涙をぬぐっていた。当時の時刻表を調べると、あさま2号は七時二二分に高田を発車し、東京着は十五番線に十一時四一分と出てくる。

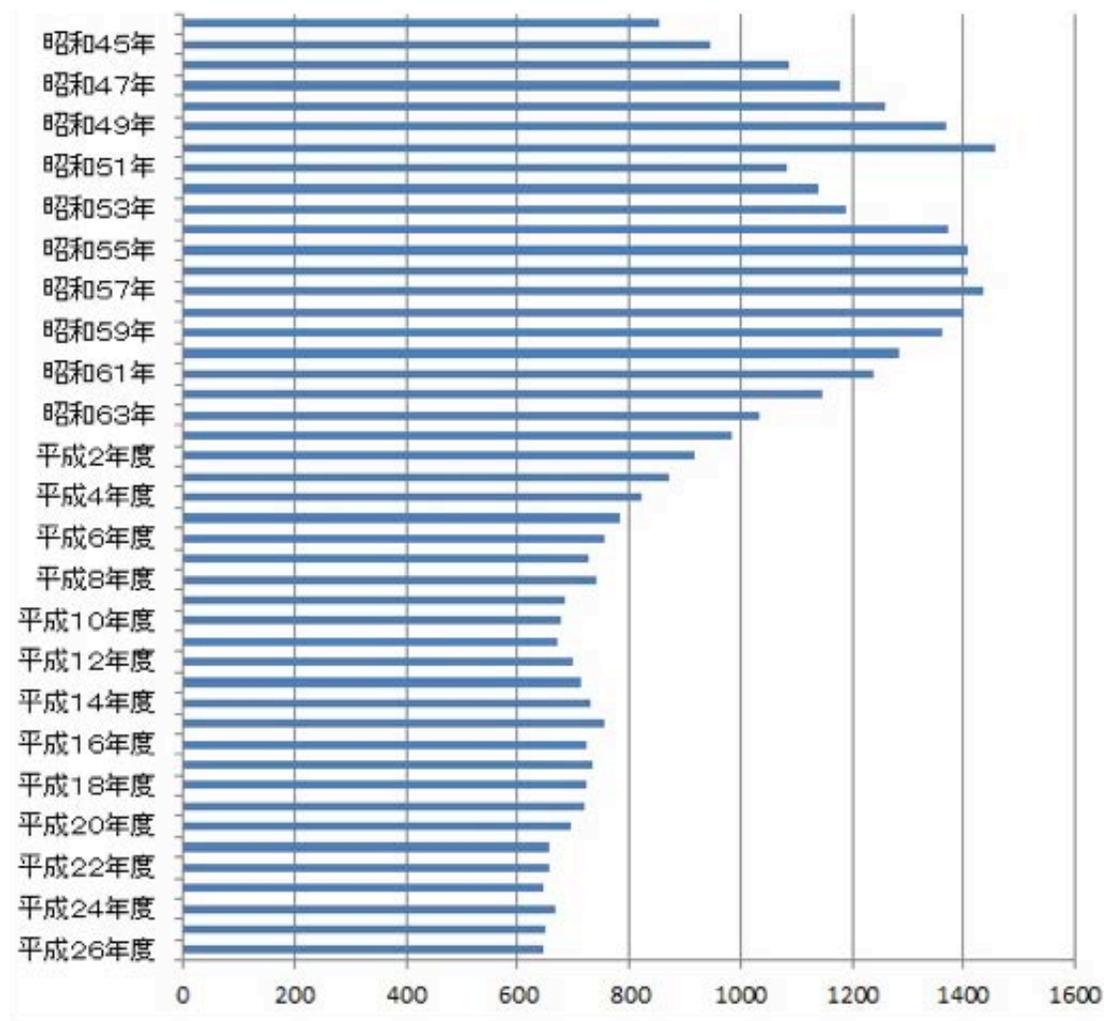
こうして私は小学校五年生から大和市立西鶴間小学校に転入した。同校は一九六七年に創立された新設校だった。図表のとおり、同校では（市内の他の小学校も同じであろうが）児童数が激増していた時代で、教室が足りず、プレハブ校舎が二棟もあった。その一方、体育館もなければ図書館もない。体育は当然グラウンドでしかできず、雨の日はなにをしていたか覚えていない。六年生のときクラブ活動で卓球クラブに属していたが、教室に卓球台を入れてピンポン球を打ち合っていた。

卒業式は屋上で行われた。もちろん、卒業式が雨にたたられることもある。それに備えて、「打ち抜き教室」といって、隣り合う二つの教室の壁が取り外せる不思議な仕掛けの教室があった。一九七〇年にできていたプールには、夏になるとプールのない隣の小学校の子どもたちが使いにやってきました。

明らかに、市の教育行政が子どもの数の急増に対応しきれていない時代だった。少子化の現在では信じられない。その少なくない部分は自然増ではなく、私のような社会増だっ

たのだろう。私と同時にこの小学校に転入してきた五年生は四人いたし、同校では転校生は珍しくなかった。教室は五十人ちかい児童であふれんばかりであった。六年生になるとき校舎が増築され、四クラスだったクラス編成が五クラスになった。

図表：大和市立西鶴間小学校の児童数の推移



出典) <http://www.ed2.city.yamato.kanagawa.jp/s-nisit/index.cfm/1,0,12,107,html>

(2016年1月12日閲覧)

上越で私が通っていた東本町小学校は一八九二年創立の伝統校で、私の亡父もそこを卒業している。もちろん当たり前のように体育館も図書館もあった。「裏」から「表」に出てきたはずが、学校の環境は「表」から「裏」にひっくり返ったようなものだ。

なかでも一番びっくりしたのは、給食の食器やフオーク、スプーンを載せるトレーである。給食が済めば毎回洗うのが衛生上当然である。ところが、西鶴間小学校では、トレーに児童が持参したふきんのようなものを敷いて、その上に給食がよそわれた食器などを置いて食べる。トレーは回収せず教室に保管される。給食室でトレーが洗われるのは金曜日の給食のあとの週に一回だけである。そのふきんも、毎日家に持って帰って、翌日には清

潔なものに代えていただろうか。まったく心許ない。調理員さんの人手不足でこのような措置をとっていたのか。理由は不明のままだ。

それでも悪いことばかりではなかった。西鶴間小学校の給食には、ちゃんとした牛乳が出た。東本町小学校では脱脂粉乳だった。おそらく私の世代が脱脂粉乳の給食を知る最後の世代だろう。

厚生労働省令の乳及び乳製品の成分規格等に関する省令二条三一項には、こう規定されている。「脱脂粉乳」とは、生乳、牛乳又は特別牛乳の乳脂肪分以外の成分を除去したもののからほとんどすべての水分を除去し、粉末状にしたものをいう」。

栄養価が高く保存も利いたので（たぶん安価でもあったのだろう）、学校給食に供された。これをお湯で溶かしたものを飲むわけだが、とにかくまずかった。牛乳を温めると膜が張るのと同様に脱脂粉乳にも膜ができた。これをよけながら口に流し込むのは苦行以外のなものでもなかった（もしかしたら、東本町小学校でも私の在学中に牛乳に切り替わっていたかもしれない）。

こんなことを思い出したのも、前号にも登場してもらった中学時代からの親友で、シンガーソング・サラリーマンのクボタツのおかげだ。私がクボタツと同じクラスになったのは中学三年のときだが、彼も西鶴間小学校の卒業生である。そのクボタツが六年生のときの担任のM先生も、二〇一三年九月のクボタツ初ライブに来られた（その後も来られている）。

私が担任していただいたことはなく、「若くてはつらつとした女の先生」という印象をおぼろげにもつのみだった。クボタツのはからいでライブでは隣に座らせていただき、かくかくしかじかと自己紹介をした。そして開演を待つ間、M先生と上記のような昔話に花を咲かせたのである。M先生はその後の異動を経て、再び校長として西鶴間小学校に戻ってこられたことをそのときはじめて知った。

光陰矢の如しという。当時特急で四時間二十分かかった高田・東京間も、二〇一五年三月の北陸新幹線金沢開業で上越妙高・東京間は最短で一時間四六分に大幅短縮された。「裏日本」は交通の上でも死語になった。その間に私は、「表」デビューしたころの振り返りを記しておくようになるまでに、年齢を重ねてしまった。

二〇一六年一月十五日